専徳寺報

第489号
令和7年8月11日発行
浄土真宗本願寺派
専徳寺

〒740-0044 岩国市通津2764
☎0827-38-1124 FAX38-1000
http://sentokuji-iwakuni.net/
岩国 専徳寺 検索

歓喜会法要

御案内

浄土真宗は盆会を「歓喜会（かんぎえ）」と呼びます。故人を通して、自ら仏法に出遇えた喜びを味わいつつ、共々にお念仏申し今年の夏をしめくくりたいと思います。どうぞお参りください（帰りの送迎あり）。

日程

8月29日（金） 昼 1時半～3時半
30日（土） 朝 10時～12時

ご講師

本願寺派布教使
木下明水 師
（八代市）

新物故者追悼法要

新物故者を偲びご遺族の焼香があります。

送迎します

市内から車以外でお参りの方は、法座の後に送迎いたします。ご遠慮なくおっしゃってください。ご参拝お待ちしています。

●参拝セット

①お念珠・②聖典・③門徒式章・④聴聞カード
どうぞお持ちください。

【法座奉仕】 保津地区 ※法座後の片付けをお願いします。

サマースクール（8月2日）

22名の小学生が参加してくれました。土井健先生の科学クラフトは「思い通りに動かせるタコ」（浮沈子）と「タココプター（揚力の話）」でした。また龍谷大学伝道部（大原義覚・平一眞・大原寛子）さんによる人形劇や室内オリンピック、最後は保護者のご協力で屋台を楽しみました。「流しソーメン」が登場したり、楽しい一時でした。

【法句】 279 実践あるを宗教と云う。実践の無いものは単なる思想・学問であり、又哲学である（深川倫雄）

如来・人・言葉　141

怖れを抱いた いのちを生きる

五怖畏

本願寺派司教
龍仙寺住職　武田一真

おそれの正体

ちゃんと生活していけるだろうか……。（不活畏）
誰か悪口を言っていないだろうか……。（悪名畏）
周りからどう見られているだろうか……。（怯衆畏）
死んでしまうのではないだろうか……。（命終畏）
死んだらどうなるのだろうか……。（悪趣畏）

などなど、私たちは誰しも、どこかにおそれ（畏れ）を抱いて生きています。私も、お寺や家庭、子育てのことなど、不安の尽きることはありません。

仏教では、凡夫とは「畏怖心（おそれ）の去らぬもの」とも定義されますが、なぜ、私たちはおそれを抱かずには生きられないのでしょうか。

先日、市の河川工事のために、お寺の移転を余儀なくされたというご住職のお話をお聞きしました。急転直下の移転要請で、ご門徒さんも含めて紛糾されたそうですが、その中で、移転先が決まった後にその土地が岩盤まで25メートルもあることが分かり、自費で何本もの杭を打たねばならなかったとお聞きしました。どんなに頑丈に設計された建物でも、しっかりとした地盤の上に建っていなければ、その全体が不安な空間にしかなりません。私たちに不安やおそれが尽きないのも、そもそも私たちが、手のつけようのない危うさの上に生きているからではないでしょうか。

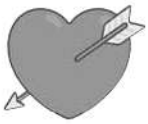
いのちは底抜け

以前、テレビで恋愛学という学問の特集がありました。恋愛を学問として専門研究する分野があるとは知りませんでしたが、研究者の先生から興味深いお話がさまざま紹介されていました。その番組の中で、ある芸人さんがこう感想を述べられました。

「いやー、先生、人間ってほんとうに、こと恋愛に関しては、学習能力ゼロですよね！」

待つべきか、押すべきか、引くべきか、どう対応すべきか。他人事ならば、私たちはときに悟ったようなアドバイスもするのでしょう。しかし〝自分〟のことになると、とたんに分からなくなる。それが初恋であろうが、最後の恋であろうが、たとえ何十歳になっても、何をどうすべきかまったく分からなくなる。それが恋に落ちるということであり、それを「学習能力ゼロ」と表現されたのでした。

これは恋愛に限らないのでしょう。何のために生まれて、どこに向かって生きているのか。私たちは〝いのち〟について、まさしく学習能力ゼロなのではないでしょうか。



日曜学校で、子どもたちに大きな声で聞きました。

「誕生日おぼえてる？」

子どもたちは、「○月○日！」と口々に大きな声で答えてくれましたが、質問を変えて、「じゃあ、生まれてきたこと、おぼえてる人？」と聞くと、とたんに手があがらなくなりました。あ

る男の子は言いました。

「知らんよー。だってお母さんも知らんかったもん」

聞くと、その子が生まれたとき、お母さんは帝王切開で全身麻酔にかかっておられたそうです。お母さんも知らないうちに生まれてきたとは驚かされますが、実は弘法大師も同じようにおっしゃっています。

我を生める父母も
生の由来を知らず
生を受くる我が身もまた
死の所去をしらず

（私を生んでくれた父母も、このいのちがどこから来たのか知らないし、生んでもらった私も、どこに行こうとしているのか分からない）

どれだけ知識は増えても、私は肝心の〝いのち〟について何も知りません。産声をあげたそのときから、まったく変わらず、投げ出されたように今日を生きています。まさに学習能力ゼロであり、いのちの底はすっぽりぬけています。だからこそ、私たちは、おそれや不安が尽きないのでしょう。

み親のぬくもり

では、私たちは、このいのちをどう生きるべきでしょうか。親鸞さまは、煩悩を断ちきって生死を貫くいのちの意味を見通された、そういう方ではありませんでした。何ひとつ見通せない凡夫のままで、ひるがえることのない安らぎを、歩みぬかれた方でした。そこには、何も分からない、その危うささえ問題とならない世界がありました。

以前、あるご家庭にお参りしたときのことです。お父さんが赤ちゃんを抱っこされていたのですが、「おはようございます！」とご挨拶してから、「失礼します」とお家を出るまで、赤ちゃんはずっと、お父さんの腕の中で寝ていました。私がご挨拶をしても、おりんを鳴らしても、お経を読んでも、ご法話させてもらっても、まったく起きません。気持ちよさそうに寝ていました。

赤ちゃんは、いのちの意味どころか、いのちという言葉すらない世界を生きています。これほど危うい状態はありません。しかし、あたりまえですが、赤ちゃんは、「いのちの意味が分からない」と泣くことはありません。「どこにいるのか分からない」と泣くこともありません。何も分からない、そのことが問題にならないぬくもりに抱かれているのでしょう。

ですから、実はその日も2度だけ、その子が泣いた瞬間がありました。私が何をしても起きませんが、お父さんがそろそろいいかな……と赤ちゃんを置こうとしたその瞬間だけ、背中にスイッチでもあるかのように、その子は泣きました。

赤ちゃんが泣くのは親の手が離れようとしたとき。言葉をかえれば、親に抱かれていれば、何も分からない小さないのちのそのままで、おそれる必要のない世界がそこにあるということですね。

お念仏も同じでした。分かったような顔をしていても、肝心の〝いのち〟について、私たちは何も分かっていません。けれども、この身にこそ、届いてくださっているぬくもりがある。阿弥陀さまのお慈悲のみ手は、手のつけようもない危うさの上に生きている凡夫のためにかけられていました。親鸞さまは、そのお慈悲に安んじて、歩みぬかれた方でした。

ともにお念仏いただきましょう。おそれる必要のないお慈悲の中で、精いっぱい、私たちも、底のぬけたこのいのちを歩みぬかせていただきましょう。

（『御堂さん』２０２５年８月号より）

寺内だより

●み仏にいだかれて〔葬儀勤修〕

5日

様

●ご恩を偲び〔法事勤修〕6月4日～8月4日

【通

江　恵

●ありがとうございました〔永代経志納〕

七回忌のご縁に

法義相続に大切にお供えさせていただきました。

法物下附式〔入仏式〕

お給仕の日々、ご恩報謝の生活の始まりです。お慶び申しあげます。

●専徳寺倶楽部夏の集い（7月20日）

今年も草刈りとおみがきの分担作業でした。猛暑の中ご参加ありがとうございました。

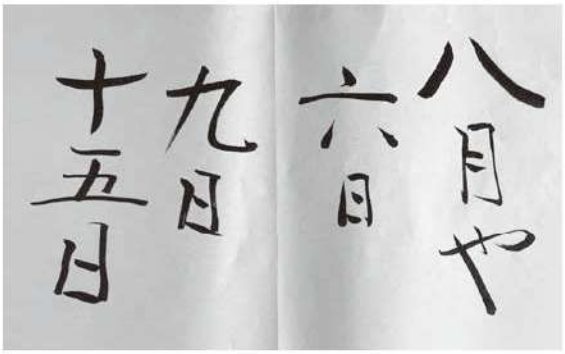
【参加者】

秋嶋進一、浅井佐、上田浩之、小方基史、岸井清市、吉柴伸一、木戸久夫、白田憲光、中崎覚、半田正昭、半田健二、廣田尚志、藤本昭範、増本英一郎、松重吉英、村重親男、村中紀一郎、森上博之、森田幸一、吉柴恵子、村中久子（21名）

●法座余香（仏婦法座　6月17日）

ご講師は初めてご来講の松月英淳師（糸島市）でした。楽しい一座を賜りました。

今月の掲示板（八月）



詠み人知らずの歌です。

「知りません。」

「どういう意味ですか？」

若い人は即答です。

知らなくてもどういう意味か若い人には考えてもらいたいものです。

戦後八十年です。